

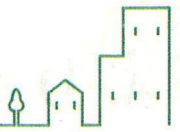
採光や風 古都の知恵

狭い間口に深い奥行き、風通しと採光を考えた格子戸。個性あふれる京町家に憧れる人も多いでしょう。マンションにも、この風情を取り入れられないだろうか。土間を広げ、部屋間をつなぐ通路を増やすなどの大胆な改修で、京町家風に生まれ変わったお宅を訪ねました。

(辻本洋子)

住まいる Room Renovation Reform

京町家風マンション

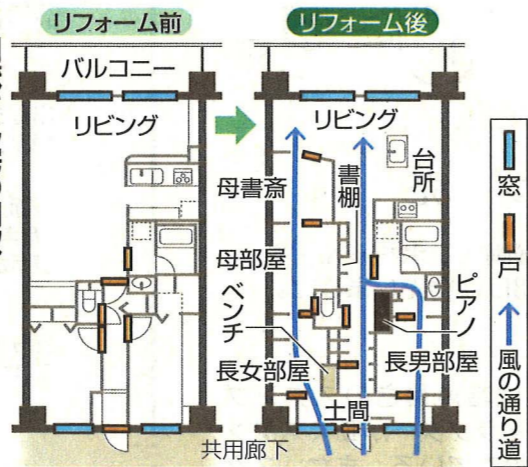


京都市に住む加茂みどりさん(55)は、大阪ガスエネルギー・文化研究所の主席研究員で、1級建築士の資格も持つ。30年余り、快適な集合住宅のあり方を研究してきた、いわば「住」のプロだ。現在、中学3年の長男(16)と小学6年の長女(12)と3人で暮らす。1998年に新築で購入したマンション(76平方メートル)は一般的な間取りの3LDKだったが、リビングに隣接する部屋の壁を取り払って寝室も



広げた玄関の土間には障子を設置、風通しや採光を確保した

兼ね、残る2室は書庫、物置として使用。ほぼ「ワンルーム」の状態だった。子どもが小さいうちはみんな一緒に良かったが、成長するにつれ、自分の部屋をほしいがるように。経年で傷みも目立ち始め、2017年に改修を決めた。京町家は部屋が引き戸で区切られ、開け放すと家の端から端まで風が吹き抜ける。実家が京町家だった加茂さんは、その風の流れをマンションでも再現できないかと、エムズ建築設計事務所(大阪府吹田市)の1級建築士、三沢文子さんと話し合いを重ねた。まず手をつけたのは玄関の土間。元は幅0.9メートル(奥行き1.2メートル)だったが、部屋の間口いっぱい約4.5メートルに広げた。おかげで玄関に大きな窓が2か所でき、内側に障子を取り付けて風通しと採光を確保。ドアの内側には上下が開く障子を用い、和の風情を醸し出した。



加茂さん宅の間取り

加茂さんが提案する「プライバシーライン」のアイデアは、大阪ガスの実験集合住宅「NEXT21」(大阪市天王寺区、全18戸)でも取り入れられている。共働きの子育て世帯や要介護の親と暮らす家族などに住んでもらい、実証実験を進める。

NEXT21ではこれまでも、「環境」「エネルギー」などの視点から住まいのあり方を提案。公募した社員と家族が実際に住み、効果を検証してきた。1994年度から取り組んだ、住宅のエネルギー源に燃料電池を取り入れる試みは、家庭用燃料電池「エネファーム」として2009年に商品化された。

に収納。一部をくぼませてベンチやピアノも配置するなど、限られたスペースを有効活用した。土間からのルートは三つ。真っすぐ進めばリビングに続き、左右は子ども部屋。長男の部屋はその奥の洗面所に、長女の方は加茂さんの部屋と書斎につながり、それぞれリビングにも出られる。ドアを引き戸に替え、全て開ければ玄関からリビングまで、風の通り道が3本できる仕組みだ。

加茂さんが提案する「プラ

イバシーライン」のアイデアも取り入れた。育児や介護サービスを利用する際、家族と訪問者が使う部屋を線引きして貴重品などを管理する考え方で、家族の不在時にも訪問してもらいやすくなるという。加茂さんは自室と書斎を外から施錠できるようにした。「集合住宅はもっと工夫できるし、快適になるはずだと感じていた。その思いを形にできた」。仕事で得た知見を生かした改修に、加茂さんは満足している。

玄関からリビングに抜ける廊下のベンチに座る加茂さん。壁一面に書棚を取り付け、スペースを有効活用した(京都市) 長沖真未撮影

